

# 令和元年度『稲作だより』No.1

## 令和元年産水稻 生育と今後の管理（移植から中干しまで）

令和元年6月13日  
JA いるま野

### 1 気象状況(さいたま観測所の気象データ)

#### ○気温

今年の5月は、平年よりも気温が高い日が多く、特に5月24～27日では平均気温が特に高くなりました。5月上旬の平均気温は**やや高い**(+0.7℃)、中旬は**高い**(+2.0℃)、下旬は**かなり高い**(+3.2℃)でした。

#### ○日照時間

好天の日が多く、日照時間は**多く**推移しました。(5月平年比**126%**)

#### ○降水量

5月合計としては平年よりも**少なく**(5月平年比**78%**)、雨の降らない日が続きました。5月21日に**68ミリの降水**がありました。

#### ○その他

**5月4日の降雷や冷たい雨**により、一部の地域で苗が寒さにあたった影響で苗の伸びが停滞しました。

※1. 6月6日発表の1ヵ月予報では、向こう1ヶ月、前線や湿った空気の影響を受けやすく、日照時間は平年並か少なく、気温と降水量はほぼ平年並の予報です。

※2. 6月7日梅雨入り宣言

### 2 現在までの生育状況

6月10日の生育状況は下表の通りです。

表1 (6月10日調査結果: JA展示圃データ)

品種	調査(年)	田植時期	草丈(cm)	茎数(本/株)	葉色
彩のきずな	2019	5月上旬植	36.5	20.9	5.3
		5月中旬植	32.9	12.0	4.9
		5月下旬植	27.3	8.8	4.8
	2018	5月上旬植	40.1	27.4	4.5
		5月中旬植	30.2	12.4	4.9
		5月下旬植	26.4	8.0	3.7
コシヒカリ	2019	5月上旬植	44.9	21.3	5.2
		5月中旬植	34.0	11.0	5.3
		5月下旬植	26.8	3.6	2.3
	2018	5月上旬植	48.9	28.3	4.6
		5月中旬植	30.4	10.5	4.8
		5月下旬植	21.2	4.4	4.0

表2: 田植え時期による中干し開始時期の目安

田植時期	中干し開始の目安(約25本/株の有効茎数を確保した時期)
5月上旬植	田植後40日頃(6/15~19頃)
5月中旬植	田植後35日頃(6/20~24頃)
5月下旬植	田植後30日頃(6/25~29頃)

(1) 5月の気温が平年よりも高かったため、一部ほ場でガス害が発生して活着に影響がありましたが、全般的には好天により良好に生育し、分けつも順調に増えています。

(2) 生育状況は順調で、いずれの田植時期の草丈、茎数とも昨年よりもやや少ないです。

### 3. 収量・品質を高める水管理 ～ 土に空気も入れましょう ～

#### (1) 田植後は浅水管理

田植後は、初期生育促進のために、除草剤の処理層が形成されたら(散布後7日程度)、直ちに2～3cm程度(一部の土が見える程度)の浅水にしましょう。全面水に浸かるような湛水状態にすると、初期生育を妨げるガス害が発生しやすくなります。

ただし、低温や強風のときは、保温・倒伏防止のために深水にします。

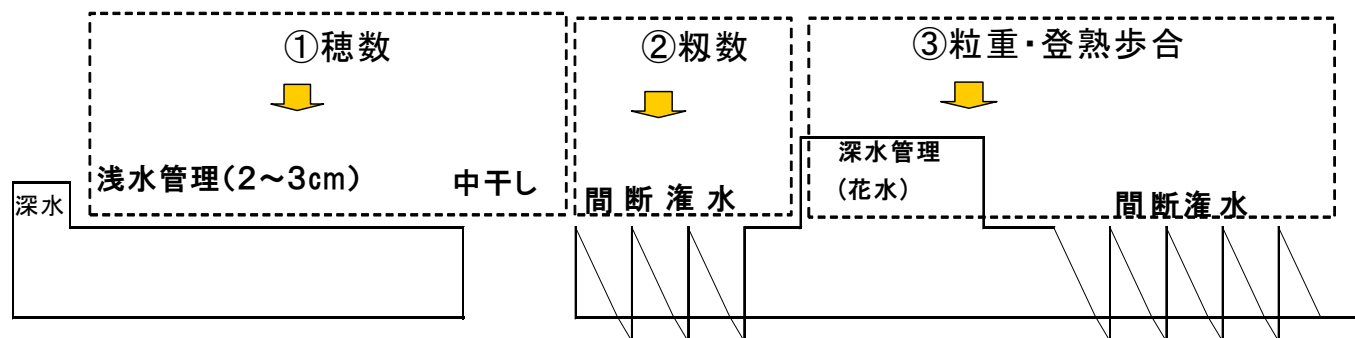
#### (2) 早めの中干し

中干しは、①倒伏防止 ②健全な根の育成 ③無駄な分けつの抑制 ④地耐力の向上等の効果のある重要な作業です。

- ・開始時期 : 1株当たりの茎数が、コシヒカリ20本、彩のきずな25本程度になったら実施
- ・実施期間 : 7～10日間
- ・中干し程度: 土の表面に「小指が入る程度の小ひび」が入る程度

#### (3) 中干し後は間断かん水

中干し直後から幼穂形成が始まります。幼穂形成期には水が必要なので間断かん水を行い、根に空気と水をやって活力を保ちます。



### 4. 病害虫情報

【参考資料】埼玉県病害虫防除所発表『病害虫発生予報6月版』5月28日発表

病害虫名	発生時期	発生量	備考
いもち病	—	少	昨年の発生量は少
イネミズゾウムシ	—	並	本田での成虫飛来数は平年よりやや少
ヒメトビウンカ	—	並	第1世代幼虫の発生量は平年並
縞葉枯病	—	多	ヒメトビウンカの保毒虫率は、過去10年間で2番目に高い

◇イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率（JA いるま野管内）

地区	H28	H29	H30
富士見市南畑	5.2	4.2	14.6
川越市古谷本郷	3.1	5.2	5.2
坂戸市紺屋（横沼付近）	7.3	4.2	13.5
坂戸市勝呂	8.3	4.7	8.3

※ヒメトビウンカ越冬世代のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、2年連続で増加しており、一部では極めて高い値を示す地点も見られています。このため、イネ縞葉枯病の多発が懸念されます。

イネ縞葉枯病(ヒメトビウンカ) -- コシヒカリ等の弱い品種  
ヒメトビウンカが病原ウイルスを媒介してイネ縞葉枯病を発生させます。縞葉枯病の症状としては、出すくみ症状になり、やがて枯れてしまいます。

縞葉枯病対策のポイント

①箱粒剤の処理

ウンカ類に登録のある箱粒剤が有効。

箱施用剤を使用していないほ場では、本田防除を実施する

②箱粒剤の残効は、田植後40～60日で、その後に多発の懸念がある場合は追加防除する

③収穫後の早めの耕耘や越冬場所の除草等です。



幼虫で越冬するヒメトビウンカ

縞葉枯病の出すくみ症状

◇本田防除推奨農薬

（価格は6月現在）

品名	コメント	規格	当用価格
なげこみトレボン	イネミズゾウムシ・ニカメイチュウ・ウンカ類対策 容器のまま水田に投げ込む殺虫剤です。 散布量：PVA容器50ml×6/10a 移植後20日以降及び稲5葉期～収穫21日前まで。	PVA 容器 50ml×6	1,910円
バダンバッサ粒剤	ニカメイチュウ・イネツトムシ・ウンカ等の害虫対策 作物体内への浸透性に優れ、散布後の降雨による影響少なく、低温でも薬効安定 散布量：3kg/10a 収穫30日前まで	3kg	1,152円
キラップ粒剤	ウンカ・カメムシ対策 薬剤効果の持続期間も長いので安定した効果 散布量：3kg/10a 収穫14日前まで	3kg	3,065円
スタークル豆つぶ	ウンカ・カメムシ対策（畔から楽々散布できるように豆つぶ化した農薬です） 散布量：1袋（250g）/10a 収穫7日前まで（水深3～5cmで使用し4～5日は湛水状態維持）	250g	3,127円

※キラップ粒剤とスタークル豆つぶは、ウンカとカメムシに対する使用時期が異なりますのでご注意ください。